

特定の社会で行われている慣習的な行為について、その由来ややり方等を文献上で探そうとすると、以外に難しいものである。百科辞典などで一般的なことはわかるが、いろいろ文献を調べていっても、根本的なことは判明しないことがある。下記の例もそのひとつである。

御用納めの風景としてテレビのニュースに必ず取り上げられるものに、証券取引所の大納会のシャン・シャン・シャンという「手締め」「手打ち」の風景がある。これは歌舞伎の口上の後にも行われるし、上棟式のあとや宴会の締めにも行われる慣習である。この「手締め」「手打ち」をなぜ行うのか。「一本締め」「三本締め」はどのように使い分けるか。なぜ「手を打つ」のか。ここに判明したことについての文献をあげてみた。

『商事慣例類集』司法省が編集し、明治17年に刊行された江戸時代の商人の取引方法等についてまとめたものである。その東京の売買ノ事に「売買ノ約束ハ各商共ニ拍手ヲ持テ確定スルヲ通例トス」とある。これを裏付ける文献として井原西鶴の『日本永代蔵』に「千石万石の米をも売買せしに、兩人手打ちて後は、少しも是相違なかりき……」とあり、大阪でも同じように行われていた行為であることがわかる。これらの文献から「手締め」「手打ち」は、売買の契約を確定する行為であることの説明がつく。現在でも西の市で客が買う熊手が決まると手を打ちそれから代金を支払う習慣として残

っている。

次に「一本締め」「三本締め」の使い分け方については、三方まるくおさまるよように三方向に向かって手を打つとか、それを省略したものとか、いろいろ説はあるようだがこれに関する文献は見当らなかった。

それでは、何故「手をたたく」のか。「手たたく」という行為の言葉が最初に出てくるのは『日本書紀』持統天皇四年春「公卿百寮羅列テ。匝拜而拍レ手焉」との項である。この文章からはどのような手の拍ち方をしたのかは分からない。我が国では、かなり古くから「手を拍つ」儀礼があったことは確かである。神社で拝む作法としての拍手（かしわで）との関連についても、伊勢貞丈が『安斎隨筆』で「拍は手偏也。カシハの字は木偏也。何の時よりか拍の字を柏の字と一ツに見て拍レ手をカシハデと覚えかたまりて拍手と云う義理の解きがたきに依りて手を打合せたる形がカシハの葉に似たるゆゑカシハデと云うなどと無理なる義理を名付け其の外さまさまの説を作りて神秘なりなどと云ふなり。もとは文盲にて手偏木偏の差別もしらず読誤りたるが後に秘説口伝などと云ふ事になりたるは笑ふべき事なり。拍レ手事は上古我が国の禮なり」と説明している。

何故「手を拍つ」ことが作法として行なわれるようになったか根本的なことに言及している文献は見当らないのである。

なお、この種の調査に利用する文献は『古事類苑』である。日本古来の事象に関してどのような文献があるか、そしてその該当部分を一目で見ることが出来る。図書館員の「座右の書」なのである。

(参考課 村上清子)